筑波技術大学におけるパラリンピック選手育成プロジェクト計画に関する報告

筑波技術大学保健科学部保健学科理学療法学専攻[1)]　同大学障害者高等研究支援センター[2)]

石塚和重[1)]　鶴巻俊江[1)]　香田泰子[2)]　天野和彦[2)]

要旨：視覚障害者にとってより魅力的で活動的な大学を目標として、筑波技術大学におけるパラリンピック選手育成プロジェクトを提案し、2005年度は国内で開催された視覚障害者スポーツについてジャパンパラリンピック陸上競技大会と水泳競技大会、2006年度に視覚障害者サッカーを視察する機会を得た。視覚障害者におけるスポーツの実施競技の状況とクラス分けについて概観し、視察報告と本大学でのスポーツの状況及び学生の実践活動報告をする。

キーワード：視覚障害，スポーツ，パラリンピック，選手育成プロジェクト，視察

1. はじめに

視覚障害者にとってより魅力的で活動的な大学を目標として、筑波技術大学におけるパラリンピック選手育成プロジェクトを提案し、2005年度において国内で開催された視覚障害者スポーツについてジャパンパラリンピック陸上競技大会（大阪）と水泳競技大会（大阪）、2006年8月の視覚障害者サッカー（大阪）を視察する機会を得た。また、2005年3月に開催した九州パラリンピック陸上競技大会（熊本）、2006年9月に開催されたジャパンパラリンピック（岡山）に本大学の学生が参加している。まず、本論に入る前に視覚障害者のスポーツの歴史や実施競技の状況及びクラス分けについて概観する。以下に述べる内容は「身体障害者とスポーツ」（国立身体障害者リハビリテーションシリーズ）の内容[1)]に基づいて解説する。

わが国の視覚障害者のスポーツ活動は、1925年に他国の組織化や活動に先駆けた競技大会として、体育大会、盲人野球（現在の名称はグランドソフトボール）、競泳、柔道大会などが行われた。また、1965年になると岐阜県立盲学校で考案された盲人バレーボール（現在の名称はフロアバレーボール）が盛んに行われるようになった。また、1945年より開催されてきた各都道府県の身体障害者運動会は、障害者スポーツ大会として地域に根づいている。

1964年に開催した、「国際身体障害者オリンピヤード、東京大会（第13回国際ストークマンデビルゲームス）」は、脊髄損傷者のための大会であったが、国内第二部として、視・聴・平衡機能障害者などを含めた大会を開催することとなり、1965年より「全国身体障害者スポーツ大会」を、国体開催地に合わせて開催されるようになった。2001年からは「全国身体障害者スポーツ大会」と「全国知的障害者スポーツ大会」を統合し、「全国障害者スポーツ大会」として名称を変更し開催された。

国際大会として始めて参加したのは、1963年の「第1回国際身体障害者スポーツ大会、リンツ大会」で1名が参加し、視覚障害者がグループとしてパラリンピック、（Paralympic Games）に参加したのは、1976年開催された「国際身体障害者オリンピヤード、トロント大会（第26回国際ストークマンデビルゲームス）」であり8名が参加した。それ以後4年毎のパラリンピックに毎回参加するようになった。

冬季パラリンピック（Winter Paralympic Games for the Disabled）は、1976年にスウェーデンで第1回目が開催され、視覚障害者のスキー大会への初参加は、1977年の「第3回カナダ国際身体障害者スキー、バンフ大会」からである。1998年3月には「冬季パラリンピック、長野大会」が第7回として開催され、国内における障害者スポーツの啓蒙に大きく寄与した。

また、1975年にわが国で誕生した「極東南太平洋身体障害者スポーツ大会（Far Eastern and South Pacific Games for the disabled（FESPIC））は2006年度で9回目の開催となる。

2. IBSA（国際視覚障害者スポーツ協会）について[2)]

IBSA（国際視覚障害者スポーツ協会：International Blind Sports Federation）は視覚障害者のスポーツについての世界的な組織である。スペインで非営利、非政治的組織として登録され、1981年にパリで設立された。世界各地の110の国や地域が加盟しており、公式の14種目について世界的な、あるいは地域的な選手権を開催することに携わっている。IBSAの使命は、全世界の全盲や弱視の人達に様々な運動の機会を提供し新しくスポーツする機会や新しいスポーツを発展させることにある。

IBSAが現在支援している種目は、陸上競技、アルペン

スキー、サッカー、ゴールボール、柔道、9ピンボウリング、ノルディックスキー、パワーリフティング、ショーダウン、水泳、自転車（タンデム）、10ピンボウリング、トーボールなどである。

IBSAは視覚障害者のトップ選手の大会、例えば世界選手権（98年のマドリッド大会、03年のケベック大会、06年フランス大会）を主催しているが、草の根のレベルでの活動も行っており、専門的な知識や経験をもとに、視覚障害のある子供達の全人的な教育におけるスポーツやリクレーション活動の効果についてのセミナーや研修の実施に関与している。

3. 競技スポーツ

A. 国内の競技スポーツ [1)]

(1) 全国障害者スポーツ大会での競技

陸上、水泳、グランドソフトボール、サウンドテーブルテニス、卓球、フライングディスク

(2) 全国大会として実施している競技

陸上、水泳、自転車、フロアバレーボール、柔道、マラソン、視覚ハンディキャップテニス、ゴールボール、スキー（アルペン、ノルディック）、グランドソフトボール、ゴルフ、ビームライフルなど

(3) その他の競技

ボウリング、スルーネットピンポン、視覚障害サッカー、盲人バスケットボール、ローンボールス、盲人キックゴールボール、ターゲットバードゴルフ、ゲートボール、ローリングドッヂボール、盲人対抗フットボール、盲人キックベースボール、アーチェリーなどである。

B. 国際の競技スポーツ [1)]

(1) IBSAの競技（1993～）

冬期スポーツ、陸上、ローンボール、ゴールボール、柔道、パワーリフティング、射撃、ショーダウン、水泳、二人乗り自転車、トーボール、レスリング、フットボール、ボウリング

(2) パラリンピック（夏季）

陸上（マラソンを含む）、水泳、柔道、自転車、ゴールボール、セイリング（ヨット）

(3) パラリンピック（冬季）

アルペン（ジャイアントスラローム、スーパージャイアントスラローム、スラローム、ダウンヒル）ノルディック（男子5、10、20kmのフリーとクラシック、女子5kmのフリーとクラシックおよび15kmのクラシック、3.5kmフリーの男・女リレー）、バイアスロン（7.5kmのフリー男・女）

(4) 世界選手権（国際大会）の競技

アルペン（ジャイアントスラローム、スーパージャイアントスラローム、スラローム、ダウンヒル）、ノルディック（男子5、10、20kmのフリーとクラシック、女子5kmのフリーとクラシックおよび15kmのクラシック、3.5kmフリーの男・女リレー）、バイアスロン（7.5kmのフリー男・女）

(5) 地域で行なわれている競技

A. フェスピック

陸上、水泳、柔道、ゴールボール

B. 地域選手権

ヨーロッパ（陸上、水泳、タンデム、ゴールボール、射撃、スキー）

(6) その他の競技

ラグビー（ノルウェー）、パイオニアビープボール（アメリカ）、ボート、カヌー、アーチェリー（イギリス）、チェス、体操など

4. クラス分け（Classification） [1)]

クラス分けの考え方は、見え方により成績に優劣が影響を与えるために、見え方の認知の度合いにより、同じようなグループに括り、クラス分けを行っている。

A. 国内では、視力や視野が良い方の眼の機能として、

(1) 視力が0～明暗弁

(2) 視力が手動弁～0.03、視野が5度以内の片方かまたは両方

(3) その他

の3クラス分類している。

ジャパンパラリンピック大会（陸上、水泳、スキー）では国際のクラス分けを採用している。

B. 国際では、視力や視野がよいほうの眼の機能として、

(1) 視力が0～明暗弁を（B1クラス）

(2) 視力が手動弁～0.03、視野が5度以内の片方かまたは両方を（B2クラス））

(3) 視力が0.03～0.1、視野が20度までの片方かまたは両方（B3クラス）

の3クラスに分類している。

問題点としては、国内における障害者の範囲の上限が両眼の視力の和が0.62であるために、国際の上限である0.1以上の視力あるいは20度以上の視野を有する人は、国際大会に参加することはできないことになっている。

5. 競技の概要（主な競技） [1)]

視覚障害者のスポーツには前述した様にさまざまなもの

がある。実施方法は、スポーツの特性に配慮してルールが考えられている。視機能の優劣を記録に影響を与えないように、国際競技大会では、B1の対象者は光も通さないゴーグルなどの着用を、種目を限定して義務づけている。また、言葉や手を叩く、笛を吹くあるいはPhoneによる聴覚的（電子音システム）補助、紐等の利用による伴走による触覚的・筋肉運動感覚的補助、B2の低視力者にはB1の補助内容に付加し、パウダーやテープ、砂、コーンなど視覚的な援助もできるようになっている。

本大学では体育の授業として、陸上競技、視覚障害者サッカー、ゴールボール、フロアバレー、水泳、ラート、インラインスケートなどがある。以下に示す競技種目はパラリンピックの種目の中で本大学の学生が体育の授業やクラブ等で活動している内容である。

A. 陸上

走・跳・投の三群がある。

競走では、国内の60mは音源Phoneでの誘導や伴走による。他の走種目（マラソンまで）は、紐等の利用による伴走が許可され、伴走者の交替が許されている。

跳躍で、国内で実施し国際に無い種目は、クラス分けの中で（1）と（2）クラスでは立幅跳、立三段跳（足を前後に開いた姿勢から踏切る）である。国際のB1とB2クラスの走幅跳と三段跳は、踏切区画が1.0m × 1.22mであり、踏切った足の先端から最短を計測する。その外に高跳の種目があり、この場合も視覚的、聴覚的な補助ができることとなっている。

投てきは、エスコートがサークルやピットまで誘導し、投射方向を確認させるところまでの援助ができる。

B. 水泳

自由、平泳、背泳、バタフライとメドレー及びリレーがある。国内も国際も競泳が主体である。壁面が視知覚認知できない者に対しては、エスコートが指示棒などにより頭部や背部を触れて、壁面が近いことを知らせてよいことになっている。

C. 柔道

柔道は、昔から盲学校などを中心として行われている。ルールは、一般の方法とほとんど同じであるが、国内の場合には相互に組み合ったところから開始する。国際の場合には相手の位置を確認し、一旦手を下に降ろした後に開始するなど、若干ルールが異なっている。

D. 視覚障害者サッカー

フットサルのルールを変更したものである。B1クラスは音源入りフットサルボールを使用し、ピッチは約20m × 40m、サイドライン上には高さ1.0-1.2mの壁を設ける。1チームは5名で、4名のフィールドプレイヤーは目隠しを行う。ゴールキーパーは弱視者、または、晴眼者が実施する。相手ゴールの後ろにコーラーが配置され、ゴール位置やプレイヤーの位置の指示を行う。キーパーのプレイ地域はゴール前の縦2m、横5mの地域に限定され、地域外のボールに対しプレイすると相手チームにPKが与えられる。フィールドプレイヤーは頭部に保護のためのサポーターが義務付けられ、ボールを追う際には声を発し、自分の位置が他のプレイヤーにわかるようにしなければならない。

E. ゴールボール

9.0m × 18mのコートで、18m離れたライン上に、エンドラインにゴールポストを置き、その前に目隠しした3名の選手が、重量1.25kgのゴム製のメディスンボールを転がしあい、そのボールを全身で受け止め、ゴールポスト内にボールが入るとポイントになる。

5. 視察報告

A. 陸上[3)]

2005年10月22日、23日に大阪市長居陸上競技場において開催された2005年ジャパンパラリンピック陸上競技大会を視察した。参加人数は151名で、その内、視覚障害者として男子16名、女子7名、合計23名が参加していた。参加種目は1人3種目までエントリーができる。視覚障害者の参加状況はクラス分けを考慮せず参加人数だけを示すと、トラック競技では男子100m 2名、200m 3名、400m 3名、800m 1名、1500m 4名、5000m 2名、10000m 2名、女子100m 3名、200m 2名、400m 4名、800m 3名、1500m 0名、5000m 0名であった。フィールド競技においては男子走高跳0名、走幅跳3名、三段跳2名、砲丸投1名、円盤投1名、やり投4名、女子走高跳0名、走幅跳1名、砲丸投2名、円盤投0名、やり投1名であった。当大会に参加するには日本身体障害者陸上競技連盟で定められた標準記録を突破した選手だけが参加が認められている。

B. 水泳[4)]

2005年8月14日に大阪府立門真スポーツセンター（なみはやドーム）において開催された2005年ジャパンパラリンピック水泳競技大会を視察した。参加人数は148名で、その内、視覚障害者として男子11名、女子8名、合計20名が参加していた。1人2種目までエントリーできる。視覚障害者の参加状況はクラス分けを考慮せず参加人数だけを示すと、男子自由形50m 9名、100m 4名、400m 1名、背泳ぎ100m 2名、バタフライ100m 1名、平泳ぎ100m 5名、メドレー200m 0名、女子自由形50m 2名、100m 3名、

図１　視覚障害者サッカーB1日本代表壮行試合

図２　2006ジャパンパラリンピック陸上競技大会

400m ２名、背泳ぎ100m ３名、バタフライ100m ２名、平泳ぎ100m １名、メドレー200m ２名であった。当大会に参加するには日本身体障害者水泳競技連盟で定められた標準記録を突破した選手だけが参加が認められている。

C. 視覚障害者サッカー

2006年８月12日に大阪の長居競技場で開催された「2002FIFAワールドカップ開催記念～視覚障害者サッカーB1日本代表壮行試合～」を視察した。当大会には本校卒業生が参加しており、エースストライカーとして活躍している。

6. 筑波技術大学のスポーツ施設・設備について

本大学の特色は視覚障害者にとって充実したスポーツ設備にある。具体的には体育館、プール、運動場、トレーニングルームなど完備されている。いずれも大学内にあり、寄宿舎と併設している。学生は余暇を利用して、健康増進や体力強化、運動能力の向上を目的として施設を活用している。また、本大学は筑波大学と隣接しており、筑波大学の施設を利用すると共に、学生間交流をしながらスポーツ活動をしている。スポーツ環境としては大変充実した環境

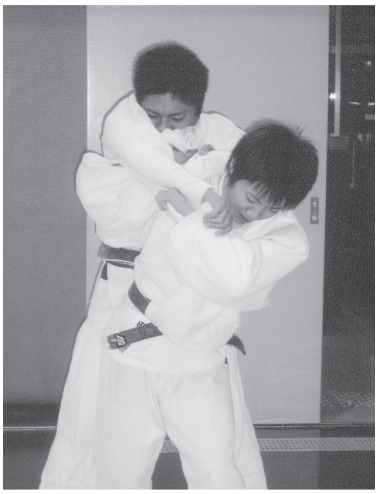

図３　柔道練習場面（筑波技術大学にて）

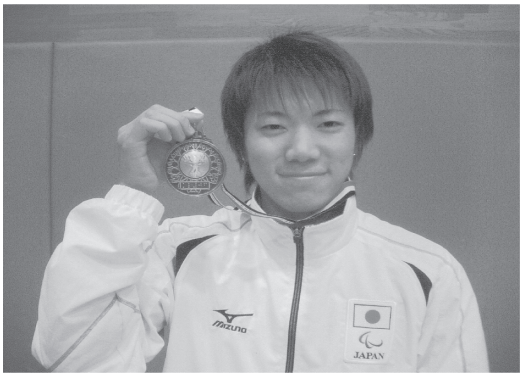

図3　クアラルンプールフェスピック大会柔道(銅メダル))

となっている。

7. 学生の実践報告

本大学では視覚障害者サッカーが盛んに行われている。2006年度開催された全国障害者スポーツ大会で視覚障害者サッカーは公開競技として実施され、B3クラスで所属しているクラブが優勝している。また、2006年11月にアルゼンチンで開催された世界大会に当大学の卒業生が参加し、結果は７位であった。(図１)

陸上競技においても2006年３月19日に開催された九州パラリンピック陸上競技大会（熊本)、2006年９月30日、10月１日のジャパンパラリンピック陸上競技大会（岡山）に参加し、理学療法学科２年の学生が短距離部門200mで優勝するなど実績を得ている。(図２)

柔道において2006年11月25日から12月１日に開催されたクアラルンプールフェスピック大会において鍼灸学科１年の学生が銅メダルという成績を収めている。(図３・4)

8. おわりに

本大学の卒業生に冬季パラリンピックバイアスロン部門で長野パラリンピックとトリノパラリンピックで活躍し、金メダルを獲得した井口深雪（旧姓小林）選手（日立システムスキー部）がいる。彼女は数々の功績を上げ、今も第1戦で活躍している。パラリンピックにはパラリンピックに参加した者しかわからない魅力がある。魅力的で活動的な大学を築くためにも、勉強だけでなくスポーツ活動にも積極的に取り組んでいく必要があると考えている。陸上競技においても、水泳競技においても視覚障害者の参加人数は少ない現状にある。4年制大学にともない、何とか本大学でパラリンピック選手を少しでも多く育成し輩出できないかと考えている。

文　献

(1) 視覚障害リリース・ネットワーク．www.twcu.ac.jp/~k-oda/VIRIN/basics/Sport.htm

(2) IBSA（国際視覚障害者スポーツ協会）：視覚障害者スポーツ．www.icevi.org/publications/educator

(3) 2005 ジャパンパラリンピック陸上競技大会　実施要項，p11，2005

(4) 2005 ジャパンパラリンピック水泳競技大会　実施要項，p31，2005

Report of Paralympic Games player development project plan in a Tsukuba technical university

Ishizuka Kazushige[1)] Tsurumaki Toshie[1)] Kohda Yasuko[2)] and Amano Kazuhiko[2)]

[1)] Course of Physical Therapy, Department of Health, Tsukuba University of Technology

[2)] Research Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired, Tsukuba University of Technology

Abstract: It proposed as a Paralympic Games player development project in a Tsukuba technical university for the purpose of the university more attractive for a visually impaired person, and active, and the Japan Paralympics track and field convention, swimming race convention, and the opportunity to inspect visually impaired person soccer in the 2006 fiscal year were obtained about the visually impaired person sport held in the 2005 fiscal year in Japan. It surveys about the situation of an enforcement game of a sport and classification in a visually impaired person, and the situation of the sport in an inspection report and this university and a student's practice activity report are carried out.

Keywords: Visually Impaired, Sports, Paralympic Games, Player Development Project. Inspection